

詩集

かみさんと階段

井之川 巨

青娥書房





詩集

かみさんと階段

井之川

青娥書房

井之川巨（いのかわ・きょ）

1993年東京生まれ。

詩誌『騒』『原詩人』同人。日本現代詩人会会員。

詩集『詩と状況・おれが人間であることの記憶』（社会評論社、1974年）

『死者よ甦れ』（新日本文学会詩人叢書、1976年）

『オキナワ島唄』（海風社南島叢書、1987年）

『石油を食いすぎた胃袋』（原詩人社、1993年）ほか。

現住所＝東京都品川区大崎 4-2-13-405

詩集
かみさんと階段

発行日 一九九八年七月一日 第一刷

著者 井之川巨

発行者 加清 蘭

装丁 山崎 晨

発行所 青娥書房

東京都千代田区九段南三―三―十二 〒102-0074

電話〇三―三二六四―二〇二三

振替〇〇一九〇―二―二一四〇〇

印刷所 壮光舎印刷

製本所

© 1998 Kyo Inokawa

Printed in Japan

ISBN 4-7906-0174-9 C 0092

* 定価はカバーに表示してあります

詩集

かみさんと階段

井之川巨

目次

日本海で泳ぎたいと夢見た

10

日本海へ

10

我慢

11

兎と亀

12

見えない糸

13

獲物

14

笑った顔

15

海軍の叔父さん

15

喧嘩

17

草刈り

17

初恋

18

セピア色の街

20

初日

20

シマウマの風景

20

クラミジア菌

川

椎の実

都市の時間

雨の午後

朝

猛暑

世界地図

記憶

この道

大工さん

螺旋階段

ビールの夏

雨は天から涙は目から

結膜炎

近視眼

花便り

ボロボロ

鳥の目

目と足の関係

その目は

インスタントシニア

消えたハーフトーン

腐れ目

まだ生きてますか

鏡の顔

迷路

墓地

苦勞

生

お花見

おい兄弟

ハイ・ミス

歳月

33

34

35

36

36

37

38

40

40

41

42

42

43

43

44

45

45

大切に

老化現象

○さんの猿山

今日の味方は明日の敵か

住宅ローン

宣伝力ー

大いなる浪費

侵略

悪口

ある暴行事件

社会主義

二つの顔

殺したい

人気者

殺すな

歳末

スターリン

むかし話

伝説の男

よっぱらいの死

かみさんと階段

階段

酸欠

散骨

散骨

百三十歳

墓参り

茶碗の音

お賽銭

職安

ハイハイ

殺し屋

58

60

66

72

72

73

74

74

75

75

76

77

77

78

79

ニンニク薬

母と妻

愛と逃亡

ケイコの子守歌

ケイコ病む

井之川巨小論

西
杉夫

あながき

126

119

106

94

82

80

79

かみさんと階段

日本海で泳ぎたいと夢見た

日本海へ

小学校へ行く前から

泳ぎがうまいと褒められた

泳ぎがきれいだとも言われた

五人のきょうだいたちと葉山海岸で泳いだ

両親が岩礁の上から見守っていた

深い海で泳ぐと小魚が手足にぶつかった

やがて戦争が始まると

家族はバラバラに誰も海へ行かなくなった

中学では水泳部に入りプールで泳いだ

学校を卒業するとめっきり泳がなくなった

いつも泳ぎたいと密かに思った

湘南の海はいつのまにか黒く泡立った

だが旅先ではよく泳いだ

沖繩の海はすてきに青かった

三陸の海は冷たく手足が伸びなかった

大病のベッドで日本海で泳ぎたいと夢見た

この夏その願いを果たそうと出かけた

新潟・関屋浜で泳ぐと

砂浜で心細げに見ていたかみさんが

泳ぐ姿がきれいに見えたわと小さく笑った

我慢

——泥水すり草を噛み

ラジオからいつも軍歌が流れていた

——兵隊さんのおかげです

僕にも兵隊さんの苦勞が耐えられるだろうか

そう考えて学校帰り

近所の下級生を家まで背負ってみた

背中が痛かったけど最後まで我慢したんだ

そう報告すると、母は

「ばかばかしい」

とだけ言つて台所仕事をつづけた

兎と亀

僕は

休みなく歩いているつもりなのだが
どうやら

生まれついでゐる亀の性らしく
いっこうに山に近づかない

後からきた若い兎たちは

びよんびよん追い越していく

昔の中国人は

寝ている兎を見たら

揺り起こしてあげると聞いたが

僕なら

寝ている兎の枕は思いきり蹴とばし

起きて走りだせばよし

のうしんとうでも起こして

くたばってしまったも

それでよし

見えない糸

僕は玄関をでて表通りを歩いた

買物帰りのおばさんとすれ違った

じゃまな電柱がたつ四つ角を曲がった

音楽学校へいく男女の学生とすれ違った

急坂を下っていくと

背後からきた自動車が

風をおこして僕を追い抜いた

そのとき突然、僕の背中に

透明の糸がのびていることに気づいた

その糸は家から表通りへつながって

じゃまな電柱のある四つ角を曲がって

急坂を下って

ずっと駅まで一本にのびている

糸はどこまでものびてのびて

僕が通う中学校の玄関までついてくるだろう

その糸は僕の目にしか見えないのだ
僕の目にしか見えない糸が

道ゆく人の足にからみつき

電柱に巻きつき

自動車の車輪にひかれもつれている
もし夕方、学校が終わって

僕の後ろにのびる糸をたどっても

もう二度と僕は

わが家に帰りつけないのではないか
僕はとても心配になって

駅前の公衆便所の脇に立ちすくんだ

獲物

ふるさとの川はすべて護岸された

魚たちは海まで流れてしまった

子供たちは人工池にビニール紐をたらし

小さいいのちを狙っている

母と娘のポリバケツにザリガニ五匹